



今月の記事

自立を支える

布おむつ

ユニットケアの壺

リレーエッセイ

今月の愛の園



生活相談員

千葉明大

自立支援プログラムを担当して

和歌山県では、社会福祉法人と連携した「自立支援プログラム事業(社会的な居場所づくり支援事業)」を行っています。この事業は、就労や日常生活を送るうえで課題を抱えている方々に対し、社会福祉法人の協力を得てボランティア活動の場を提供することにより、規則正しい生活態度やコミュニケーション能力等、就労の前提となる社会性の向上を図ることを目的とする事業です。

愛の園でも昨年夏よりこの事業に参加し、お二人を受入れました。

初めての受け入れでもあり、最初はオリエンテーションを通して車椅子操作の注意点や施設概要の説明・見学を行うことで、特別養護老人ホームとはどのような施設であるのかを理解していただきました。次の段階ではユニットへ実際に入っただき洗濯物畳みや、室内掃除を担当していただきました。

今回の支援の中で一番力を入れたかったことは、入居者と関わることでコミュニケーション能力を身につけていただくことで、就労による社会復帰という最終目標に向かって、少しずつであっても自分自身の居場所を見つけるためのきっかけに繋がってほしいと考えました。

しかしながら、逆に認知症の入居者とのコミュニケーションの中で何度も同じ会話が繰り返されることなど、難しさを感じられた場面もあり、事前の説明をしっかりと行うべきであったことを反省させられました。

今回の受け入れでは結局2名共に事情により途中でプログラムを終了することとなり、目標に到達することが出来ず支援計画の内容に課題が残りました。次回以降は今回の経験を活かし、より良い支援を行うことが出来る様に努め、今後もこうした行政の自立支援活動に積極的に協力していきたいと考えています。



節分のひとこま。赤鬼・青鬼と福の神とのスリーショットです！ 2/3

布おむつを使っています

園長

武藤直二

愛の園では各個室とリビングに備えられたトイレでの排泄介助を行っていますが、入居者の皆さんの状況に応じて、ネルと晒の布を組み合わせた布おむつを使っただき方もおられます。

便のゆるい方にとっては、ビニールが使われていて水分が沁みこまない紙おむつに比べ、布おむつは皮膚にやさしく良好な状態を保つことができます。また、沁み込むことによって紙おむつより漏れを少なくすることができます。排尿・排便回数の多い方や、爛れや褥瘡のしやすい方のケアにも適しています。洗濯を園内で行っているため、コスト面でも助けられています。

愛の園には、クリスマスの時期を中心に、毎年、桃山基督教会婦人会の皆さん、目白聖公会イクスディアの皆さん、広島復活教会婦人会の

皆さん、立教女学院藤の会の皆さん他から、心を込めて縫ってくださるネルと晒の布おむつ、清拭布、タオルなどがたくさんプレゼントされます。おむつは排泄物などの色や出血の有無を確認するため白無地で作っただき、色・柄のある布やおむつに使うには古くて弱い布は35cm四方に裁断していただき、使い捨ての清拭布として使用しています。これらはMRSAやノロウイルスなどの感染症の対策にも大変役立っています。古くなった晒の布おむつも最後はほどいて使い捨ての清拭布にしています。ご支援いただいている皆様には心より感謝申し上げます。

布おむつは交換や洗濯に手間がかかるため交換の回数が減り随時の介助に向かない、排泄後の不快感が大きいなどの指摘もありますが、繰り返し使えるため逆に頻繁に交換することができ、尿意や便意を取り戻すことも期待できます。トイレでの自立した排泄が維持できるよう努め、同様におむつを使用する方にも手間を惜しむことなく、適切でやさしい排泄介助を丁寧に進めてまいります。



昨年のクリスマスに届けられたおむつと清拭布の一部



ユニットリーダー

山本哲史

ユニットケアの壺(1) 住まいとしての生活

愛の園は2007年にユニット型特別養護老人ホームとして移転改築し、ユニットケアを進めてきています。

移転前の多床室中心の施設では、同じ時間に食事や排泄といった一斉一律のケアが行われることが多くありましたが、ユニットケア施設は原則個室となっており、個人に合わせて必要なときに必要な介護量を提供することで個別ケアの実現を目指しており、その理念(目的)として「入居者一人一人の生活習慣や好みを尊重し、今までの生活が継続できるように配慮すること」と規定されています。

施設を利用する方々の呼び方は、これまで入所者、利用者が多く使われてきましたが、ユニット型特養の設置基準にはハッキリと「入居者」と書かれています。入居とは住まいに入ること、入院や仮住まいではないということ

す。在宅に近い環境で入居者一人一人の個性に沿ったケアを行うということです。

私たちは日々自身の意志で好きな時間に寝起きし、食べたり飲んだり、トイレやお風呂を使っています。家にはキッチンやお風呂があり寛げる場所として居間や食堂、リビングなどがあります。こうした普通の暮らしとかけ離れたものにならないように、住まいと思えるような環境を作り、今までと変わらぬ生活を続けていけるよう配慮していくことが大切となります。



居室には私物がたくさん持ち込まれ、居心地のいい設えとなっています



リビングのお気に入りの場所で寛ろいでいただきます

リレーエッセイ(20) 「奇跡の回復」

介護職員

瀬見紋加

私の一つ年下の弟は小学校5年生から野球を始め、中学校ではセンターを守っていました。その弟が高校1年生の5月に10万人に1人という脳の病気で突然倒れてしまいました。面会に行き、目が虚ろで酸素マスクをしている弟の姿を見た私は何度も泣いてしまいました。

手術後は左半身が動かず、病院からは「治っても車椅子、もうスポーツは出来ないでしょう」と言われたそうですが、それから熱心にリハビリをして倒れてから3ヶ月後には弟はフラフラしながら自転車に乗る練習をしていました。その光景は今でも忘れられません。

そして4ヶ月後に病院から退院し、スポーツは出来ないとされた弟が野球部に復

帰することが出来ました。しかし、復帰はしましたが思うように左足を動かすことが出来ず、昔のように動けないと痛感し母の前で泣いた時もあったそうです。

3年生の夏、高校最後の試合ではプレーすることが出来ませんでした、3塁コーチとして精一杯チームを支え応援していました。

その後、OB戦では中学校の頃と同じようにセンターでの守備を楽しそうにしている弟の姿を見て、母は泣いてしまったそうです。

そんな弟は4月から作業療法士を目指し、大学へ進学します。諦めないことの大切さを弟から学びました。

次回は4ユニットの小西めぐみさんをお願いします。



三塁コーチとして大声で仲間を励ます 7/16

「キリストの愛を以って
互いに仕える」

社会福祉法人神愛会
特別養護老人ホーム愛の園

〒649-2103
和歌山県西牟婁郡上富田町
生馬 316-56

TEL (0739)47-1234

FAX (0739)47-4329

ainosono@shinai.or.jp

2~3月の愛の園

- 11(火) マリア会
- 13(木) やまびこ会
- 16(日) 日曜礼拝 じんろ太鼓演奏会
- 18(火) ひまわり会
- 19(水) 手芸サークル
- 20(木) やまびこ会
- 21(金) 社協ボランティア来園
- 23(日) 日曜礼拝
- 25(火) マリア会
- 26(水) 歯科診療
- 27(木) やまびこ会

- 2(日) 日曜礼拝
- 4(火) マリア会

編集者から

「STAP細胞」正式には、刺激惹起性多能性獲得細胞と呼ばれるこの細胞は万能細胞と呼ばれ、あらゆる細胞に変化する能力を持つとされており、昨年度に京都大学iPS細胞研究所の山中教授が発表した「iPS細胞」と似た特性をもっているとされています。

ハーバード大学の研究チームがヒトとして初のSTAP細胞の可能性のある細胞の写真を公開するなど、今後の研究結果にも注目です。

将来、これらの万能細胞を活かした治療により、癌治療や難病の治療が大きく前進する可能性に期待したいです。(C)

ホームページもご覧ください。
バックナンバーを掲載しています

<http://shinai.or.jp>